

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32639

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2016

課題番号：15K16609

研究課題名(和文) 西洋思想におけるエコノミーの概念史的研究

研究課題名(英文) A Research of the Conceptual History of "Economy" in Western Thought

研究代表者

佐々木 雄大 (Sasaki, Yuta)

玉川大学・農学部・非常勤講師

研究者番号：40598637

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、「エコノミー」という概念が、西洋思想史の中において、いかに多層的な意味を担われてきたか、また、そこから近代的な意味での「経済」がどのように成立してきたかを概念的アプローチに基づいて明らかにしたことである。その結果、人間の生を制約している「経済」を根源的に問い直し、「エコノミー」概念の多様な意味の根底には「有用性」があることを明確にした。

研究成果の概要(英文)：By the method of the conceptual history, this research showed how the concept of "economy" has taken on various meanings in the history of Western thought, and the "economy" in modern sense has been established. As a result, I fundamentally reconsidered the "economy" which regulates the life of human being, and clarified that it is "utility" that forms basis of the diverse meanings of the concept of "economy".

研究分野：倫理学

キーワード：エコノミー 概念史 経済 モラル・エコノミー 有用性 エコロジー 神学 聖なるもの

1. 研究開始当初の背景

現代の人間の生を制約している経済体制を考察するに際して、これまで主に、経済史的・経済学史的なアプローチと思想史的なアプローチがとられてきた。一方で、経済史的・経済学史的なアプローチは、膨大な研究の蓄積を背景にして、近代的な経済・経済学の成立を跡付けながらも、K. ポランニーの「埋め込まれた」経済という概念に典型的に見られるように、「経済」という概念を自明視し、それを近世以前の社会へとレトロスペクティブに当てはめてしまうという限界がある。他方で、思想史的なアプローチは、例えばウェーバーの古典的な研究に見られるように、近代的な経済体制の成立を当時の宗教運動や哲学的言説といった思想史的背景から分析しようとするが、「経済」という概念自体が自覚的に問題とされることは少ない。

また現代思想においても、レヴィナスやデリダらによって「エコノミー」が論じられる際、古代ギリシャの語源的意味である「家政」に言及されることはあっても、それが一挙にいわゆる「経済」へと結び付けられてしまい、中世や近世におけるこの概念の意味の転変が問題とされることはほとんどない。

こうした従来の研究に欠けているものは、「エコノミー」という概念がそれぞれの時代においてどのような意味を担わされてきたか、また、多層的な意味をもつこの概念がどのようにして近代的な「経済」へと収斂していったのか、という視点である。それゆえ、現代の経済体制の成立を考察するには、西洋思想のテキスト上に現れた「エコノミー」概念の変遷を跡付けるといって、概念史のアプローチが必要であると考えられるのである。

2. 研究の目的

本研究は、「エコノミー」という概念が、西洋思想史の中において、いかに多層的な意味を担わされてきたか、また、そこから近代的な意味での「経済」がどのように成立してきたかを明らかにすることを目的とする。とはいえ、西洋思想史における「エコノミー」の概念を古代ギリシャから現代に至るまで詳細に検討するには、あまりに資料の分量も範囲も膨大である。したがって、「エコノミー」概念が特に大きな変容を遂げたと考えられる、以下の二点に照準を絞って検討する。

(1) 第一には、ギリシャ語の *oikonomia* (家政) からラテン語の *dispositio* (配置、配列)、*dispensatio* (配分、配剤) への翻訳、また、これらのラテン語から近代ヨーロッパ諸語への再翻訳の過程を哲学的・神学的テキストを検討することで、その過程で付加あるいは脱落した意味を考察することである。またその際、単に翻訳語の対応関係を見るだけでなく、それらの語と概念的に連合している周辺概念(例えば、統治 *gubernatio* や

習慣 *habitus* といった関連する概念)の布置をも考慮に入れることが必要である。

(2) 第二には、「自然のエコノミー」や「有機体のエコノミー」「動物のエコノミー」「植物のエコノミー」「政治のエコノミー」「モラル・エコノミー」といったように、近世において多様な領域や対象に対して用いられてきた「エコノミー」が、近代的ないわゆる「経済」という意味へと収斂していった軌跡を「エコノミー」概念に注目して再構成することである。

これらの作業を通じて、経済的思考の基底にあって、それを枠付けている「エコノミー」概念を検討し直すことによって、現代の人間の生の条件である「経済」を根底から問い直すことを最終的な目標とする。

3. 研究の方法

本研究は、「エコノミー」概念の翻訳過程の分析、および、「エコノミー」の多様性から「経済」への収斂過程の再構成という観点から、西洋思想史における「エコノミー」の意義を明らかにするために、具体的には以下の作業を実施する。

(1) 「エコノミー」概念のギリシャ語からラテン語、ラテン語から近代語への翻訳過程を分析するために、古代・中世・近世神学の資料を収集し、それらを比較検討する。特に重要だと考えられるのは、神学的概念であるギリシャ語の *oikonomia* をラテン語に最初に翻訳したとされる初期ラテン教父テルトゥリアヌスによる『プラクセアス反駁』と、それを参照・引用しながら自らの神学を披瀝するカルヴァン『キリスト教綱要』との比較である。また、トマス・アクィナス『神学大全』における神の世界統治論と人間の経営論との検討を通じて、ラテン語における「エコノミー」周辺の概念的布置を解明する。こうした作業を通じて、翻訳の過程で付加され、脱落した意味を理解することができる。同時に、単に言葉の意味を知るだけでなく、その背後にどのような思想的背景があったのかを理解することができるだろう。

(2) 近世における多様な「エコノミー」概念がどのように近代的な「経済」の意味へと収斂していったかを分析するために、アダム・スミスに影響を与えたとされる思想潮流の資料を収集し、それらとスミス自身のテキストを比較検討する。具体的には、百科全書派、重農主義、自然法学、自然神学、スコットランド啓蒙といった各学派・学問領域における「エコノミー」概念を整理・分類すること、また、それらとスミス自身の著作における「エコノミー」との比較検討をすることである。こうした作業を通じて、スミスがその経済学を構想する際に、その眼前に捉えてい

た「エコノミー」概念とはどのようなものだったのか、また、スミスとそれに影響を与えた思想潮流の間で「エコノミー」概念がどのように継承されたのか、あるいは逆に、断絶があったのかを把握されるだろう。

4. 研究成果

平成 27 年度の研究実績は、以下の観点から、「エコノミーの概念史」のための予備的な前提を解明した点にある。

(1) 歴史的に変遷する「エコノミー」概念の基底的な意味として「有用性」が存することを解明した。西洋思想における「エコノミー」は、家政や救済史、神の世界運営、生物の有機的組織といったように、様々な意味を担っていた。しかし、浪費や贈与といった有用でないものを射程に入れるバタイユの「一般エコノミー」との比較検討を通じて、それらの歴史的に多様な意味の根底には、目的・手段連関の形式に従った「有用性」がつねに横たわっていることが剔抉された。とりわけトマス・アクィナスの神の世界統治論（配置・統宰・配剤）と人間の経営論（態勢・統治・経営）において共通して現れる *dispositio*, *gubernatio*, *dispensatio* という三つの概念の検討を通じて、トマスが目的・手段連関としての有用性を極限まで推し進めて考究した思想家であったことが示された。

(2) テルトゥリアヌス『プラクセアス反駁』における、ギリシャ語からラテン語への翻訳過程の分析を通じて、概念相互の輻輳的な関係を解明した。それによれば、通常、ギリシャ語 *oikonomia* の訳語とされるラテン語 *dispositio* には、それ以外のギリシャ語、すなわち「態勢」(*diathesis*) や「配置」(*diataxis*) といった意味が流入しているのである。そのため、テルトゥリアヌス以降、ラテン語で思考されるようになった神学においては、「エコノミー」が配置や習慣 (*habitus*) といった概念と接合していたことが明らかになった。

(3) 多様なエコノミーから近代的な経済への意味の収斂を跡付けるための予備的考察として、近代的な「経済」以外の意味における「エコノミー」概念の展開を検討した。具体的にいえば、「モラル・エコノミー」概念の検討である。「モラル・エコノミー」とは、歴史学において E. P. トムスンが食料暴動を説明するために提唱し、後に人類学や福祉国家論等へと拡張して使用されるようになった概念である。この概念を自由市場経済のイデオロギーである「ポリティカル・エコノミー」との対比において検討した。また、神学的な背景のあるリンネの「自然のエコノミー」から、ダーウィンによる「自然のエコノミー」を経て、ヘッケルの「エコロジー」

(生態学) そして「エコシステム」(生態系) へと至る思想的系譜を検討した。

平成 28 年度の研究実績は、「エコノミーの概念史」にとって重要な二つの転換点に関して、以下の諸論点を解明した点にある。

(4) 第一の転換点は、ラテン語から近代語への翻訳過程である。ギリシャ語からラテン語への翻訳過程を検討した前年度の成果を踏まえ、テルトゥリアヌス『プラクセアス反駁』とそれを参照するカルヴァン『キリスト教綱要』との比較を行った。テルトゥリアヌスは、ギリシャ語の *oikonomia* をラテン語の *dispositio* と *dispensatio* へと訳し分け、前者を神の永遠的配置、後者を神による世界の歴史的運営として区別していた。これに対して、カルヴァンは両者を「オイコノミア」(*oeconomia*) 概念を媒介として再び統合し、これによって永遠的摂理と歴史的世界を同一視したことを解明した。また、これを踏まえて、経済学の揺籃たるスコットランド啓蒙に対するカルヴァンの影響関係を、最新の研究成果を踏まえて検討した。

(5) 第二の転換点は、近世的な多様なエコノミーから近代的な経済への移行である。前年度の成果を踏まえ、「モラル・エコノミー」を説明概念と歴史的概念へと分別し、歴史的概念としての「モラル・エコノミー」の神学的起源を明らかにした。具体的には、「モラル・エコノミー」という語の初出は R. リークの説教にあり、その議論が 1690 年代のイギリスで起きた反三位一体論争の余波であり、また J. ロックによる啓示宗教擁護論『キリスト教の合理性』を下敷きにしていることを解明した。さらに、説明概念としての「モラル・エコノミー」と歴史的概念としての「モラル・エコノミー」を比較検討した結果、前者がアダム・スミスを代表とする自然的自由の体系に基づく「ポリティカル・エコノミー」(後の「経済」) に対する対抗言説であるのに対して、後者が近代的合理主義に基づく自然宗教や反三位一体論に対する啓示宗教擁護論であることが両者の相違点であり、また、目的実現のために「父」的存在の介入的働きを必要とする「見える手」の論理であることが両者の共通点であることを示した。

(6) さらに上記の点に付帯する成果として、経済と宗教との関係に関する問題が挙げられる。「経済」は近代においてエコノミーの神学的な軛から解放されることで自律化していったが、その裏面において、宗教もまたキリスト教神学という制限を超えて考察されることになる。具体的には、近代以降の比較宗教学的観点から、ロバートソン・スミス、オットー、デュルケーム、カイヨワ、バタイユらの思想を検討することを通じて、

宗教一般の本質としての「聖なるもの」概念が抽出されてくる過程を明らかにした。このような神学的なエコノミーから「経済」と「宗教」という二つの領域が形成されてくる過程に関しては、より詳細な分析を行うことが今後の研究の課題となる。

なお、以上の研究成果は、平成 29 年度に出版予定である「エコノミーの概念史」を主題とする図書において公表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

佐々木雄大、モラル・エコノミーは道德的な経済か、倫理学紀要、査読有、12 巻、2017、129 - 152

佐々木雄大、タブーは破られるためにある エロティシズムにおける禁止と侵犯、ニユクス、査読無、2 巻、2015、94 - 311

佐々木雄大、バタイユ 宇宙と測りあうほどの労働、POSSE、査読無、28 巻、2015、210 - 225

[学会発表](計 3 件)

佐々木雄大、モラル・エコノミーは道德的な経済か、日本倫理学会第 67 回大会、2016 年 10 月 2 日、早稲田大学(東京都新宿区)

佐々木雄大、聖ノ俗の区別ノ両義性、日仏哲学会 2016 年度秋季大会、2016 年 9 月 10 日、学習院大学(東京都豊島区)

佐々木雄大、モラル・エコノミーとは何か、哲学ノ倫理学セミナー、2016 年 2 月 20 日、東京大学(東京都文京区)

[図書](計 2 件)

佐々木雄大他、日本哲学選集、台湾聯経出版、2017、未定

佐々木雄大他、高等学校 新倫理 新訂版 指導と研究、清水書院、2017、457 (47-52, 159-162, 238-243, 244-247)

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐々木雄大 (SASAKI Yuta)

玉川大学・農学部・非常勤講師

研究者番号：4 0 5 9 8 6 3 7